

大鈍詫新文鬼談

おん

どん

わん

しん

ぶん

き

たん

10

15

20

25

30

A757  
2上

大鈍託新文鬼談第二号序  
 夫已身の彌陀已を救ひ心の鬼已と責の俗語ハ  
 無上の覺路あり然りと往古淳屠氏懲惡ハ  
 方便の樂獄の両道と説く質朴の世人その  
 不可思議と喝仰せしか開智究理の今時ハ  
 至るて瓦解する由又當然ありさるハ開化の人  
 心の師とる明智を勉勵して心を師とせんと希  
 望せよと爾云

大陽曆明治六年六月

万亭應賀誌



新文鬼談二編



新編  
鬼百景  
二号



48-2682

冥府六道の管  
 轄司三世野悟  
 道加母陀羅  
 樓の大會に擬  
 戲

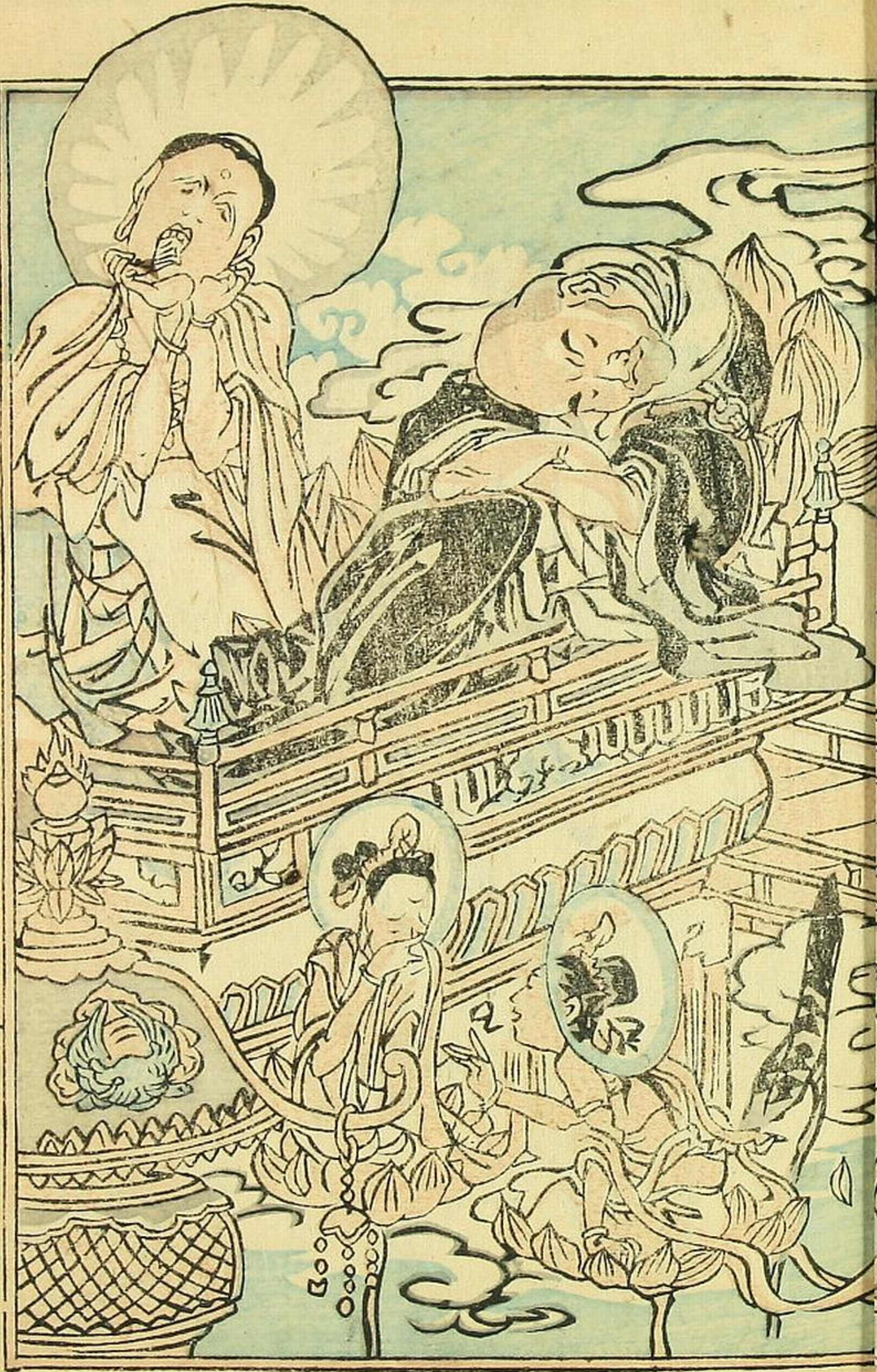
新文鬼炎二編

新文鬼炎二編



三世野悟道

ワキ師



悟道子極樂の  
 悪幣と  
 決問す  
 安樂坊  
 觀察  
 大愁辭



正月十六日

# 音曲大會

六九平民の亡きを  
猪子と云ふ事  
三條川 麻迦母陀羅樓

延會三月十六日



## 大鈍託新文鬼談 万亭應賀著

第二号

### 棄開明附言

夫泰平の代お生う者い推承おかまけん勤学此  
 意うを多し萬事の究理あうしく感鏡を佐ん  
 無益の散財あり今時さるお開明進歩の秋  
 如きは第一お心智眼を窺て親よ何の場お樂獄  
 あらんやさるお仏鏡おさるか其空言の弊を  
 本文お蒸が普通の滑稽あるを會得て偏に  
 浮屠家の目的の人とあうとあうと茲お再贅を













「おれは」  
 「おれは」  
 「おれは」  
 「おれは」

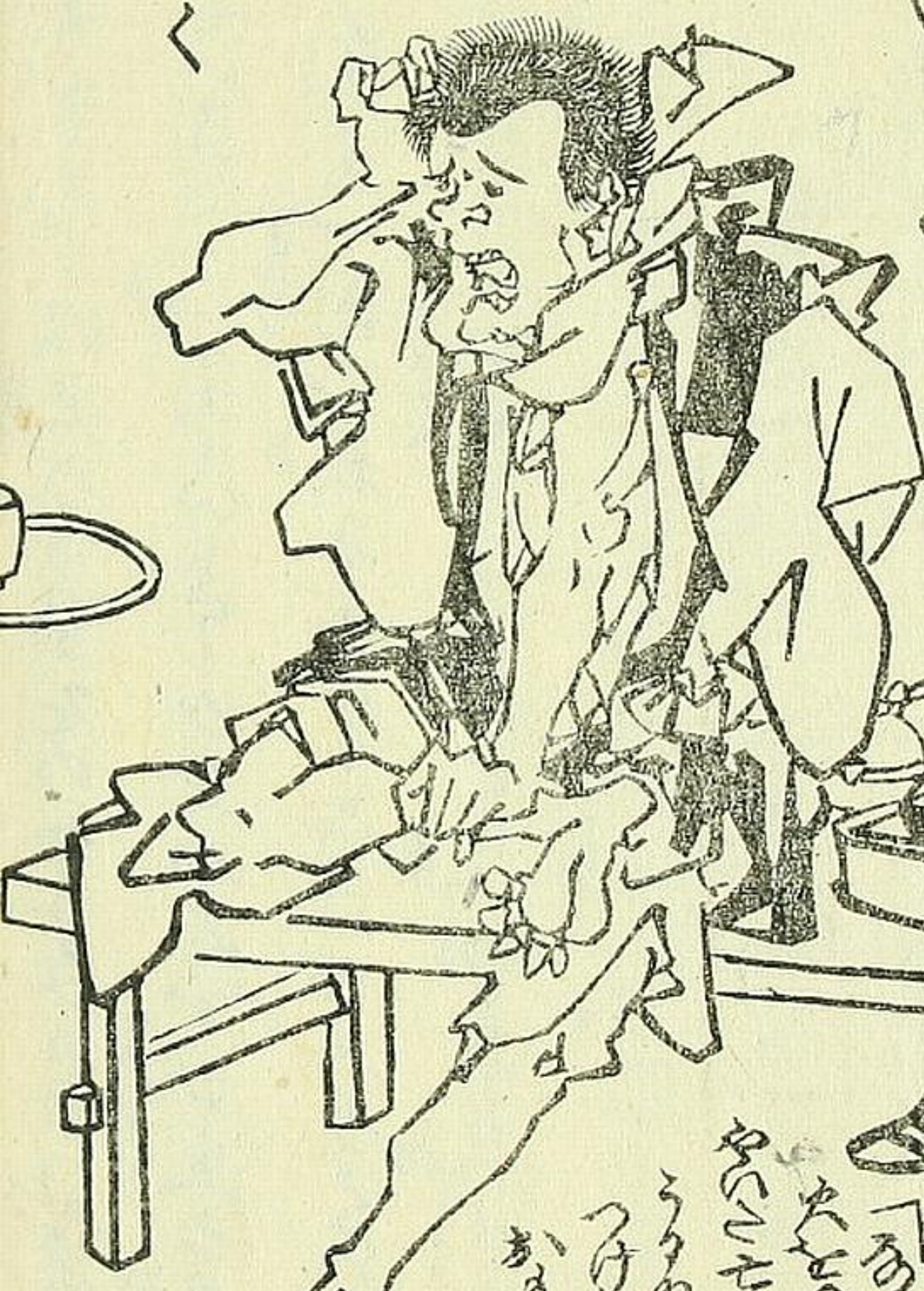
るらくぢうぢうぢ  
 奈落坊地獄の

亡者の

見世にえ七

因果應報

を聞く

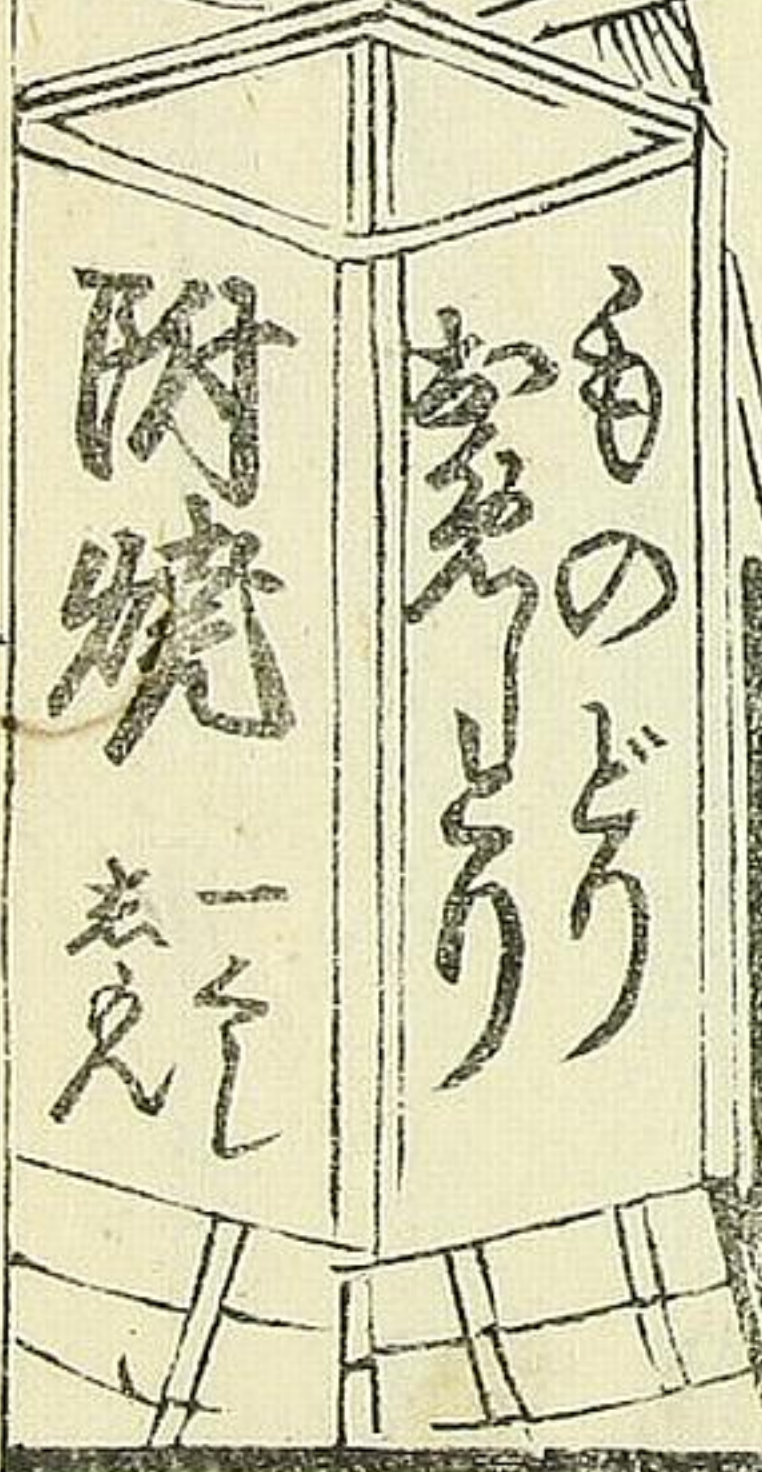


「おれは」  
 「おれは」  
 「おれは」

「おれは」  
 「おれは」  
 「おれは」  
 「おれは」

「おれは」  
 「おれは」

「おれは」  
 「おれは」  
 「おれは」  
 「おれは」



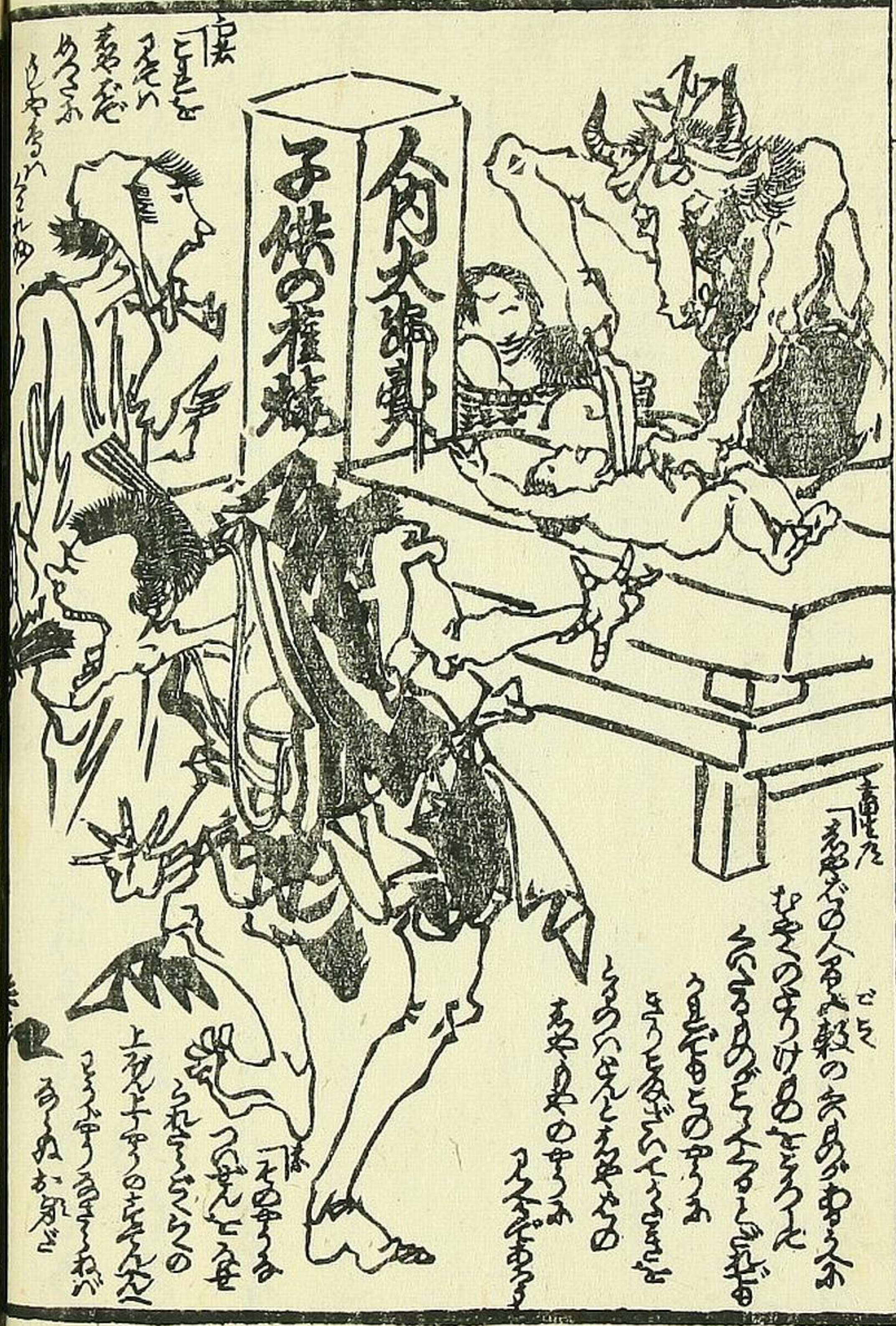


あるものゝ海川のふゆも美由みまやけあんで海防の事  
 なる「Sawada」なるいふまじりていふ事なれどの大  
 家のものも「Sawada」なるいふ事なれどこの事なれどい  
 ぞいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 「Sawada」なるいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 せびり然らざるもあはれはれはれはれはれはれはれはれはれ  
 よし「Sawada」なるいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 婦に二世と「Sawada」なるいふ事なれどいふ事なれどいふ事  
 りもせんといふ事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事

くもいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 ういふ事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 つとむ「Sawada」なるいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 竹松を「Sawada」なるいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 ういふ事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 「Sawada」なるいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事  
 十二の事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 十三の事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 十四の事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 十五の事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 十六の事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 十七の事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 十八の事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 十九の事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど  
 二十の事なれどいふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど

へびのしらねを中へゆかまひてがゆく者共の道たがせ  
しらね とび えん  
 こぞ及定へのいざうとて丁稚がうりの中兼季とをたむ  
しらね ちうねんさ  
 こゝろのまのいんがむるしんたひのいふまの松死心首能能  
あつ えい おびとく  
 由ひまのびんげんあげかへかしく家入をへつてのよ  
よ かみ や  
 後がまのいざうとていふまのいふまのいふまのいふまの  
い  
 おりしるのなまふる奈落坊とよびてあよふいふまのいふまの  
なまふる 奈落坊  
 ひざうと二代目のなまふるが布絶とあよふいふまのいふまの  
ひざう ふせ  
 へ地獄へ使ふまのいふまのいふまのいふまのいふまのいふまの  
ちぞ つゆ いふ  
 いふまのいふまのいふまのいふまのいふまのいふまのいふまの

ついでにまふとせぬゆふとくまのいふまのいふまのいふまのいふまの  
ついで まふ  
 うらまへにまふとせぬゆふとくまのいふまのいふまのいふまのいふまの  
うらまへ まふ  
 のお家おあつとせぬゆふとくまのいふまのいふまのいふまのいふまの  
お家 おあつ まふ  
 ぬらうとくまのいふまのいふまのいふまのいふまのいふまのいふまの  
ぬらう まふ  
 ひとりのいふまのいふまのいふまのいふまのいふまのいふまのいふまの  
ひとりの いふ まの  
 ろんぬらへもあつとせぬゆふとくまのいふまのいふまのいふまのいふまの  
ろんぬら あつ まの  
 ちつとせぬゆふとくまのいふまのいふまのいふまのいふまのいふまの  
ちつ まの  
 しつとせぬゆふとくまのいふまのいふまのいふまのいふまのいふまの  
しつ まの  
 さぬのあつとせぬゆふとくまのいふまのいふまのいふまのいふまの  
さぬの あつ まの



「産婦」  
「あんなに人をも殺すの女があらうか  
ちやうどおのちの産婦」

竹鶴の老母

在世時億方の念仏を唱

實子の三千両を

費て追善を営

親族縁者も多く

菩提を吊ひし其功德

更なるく

餓鬼道に墮獄す









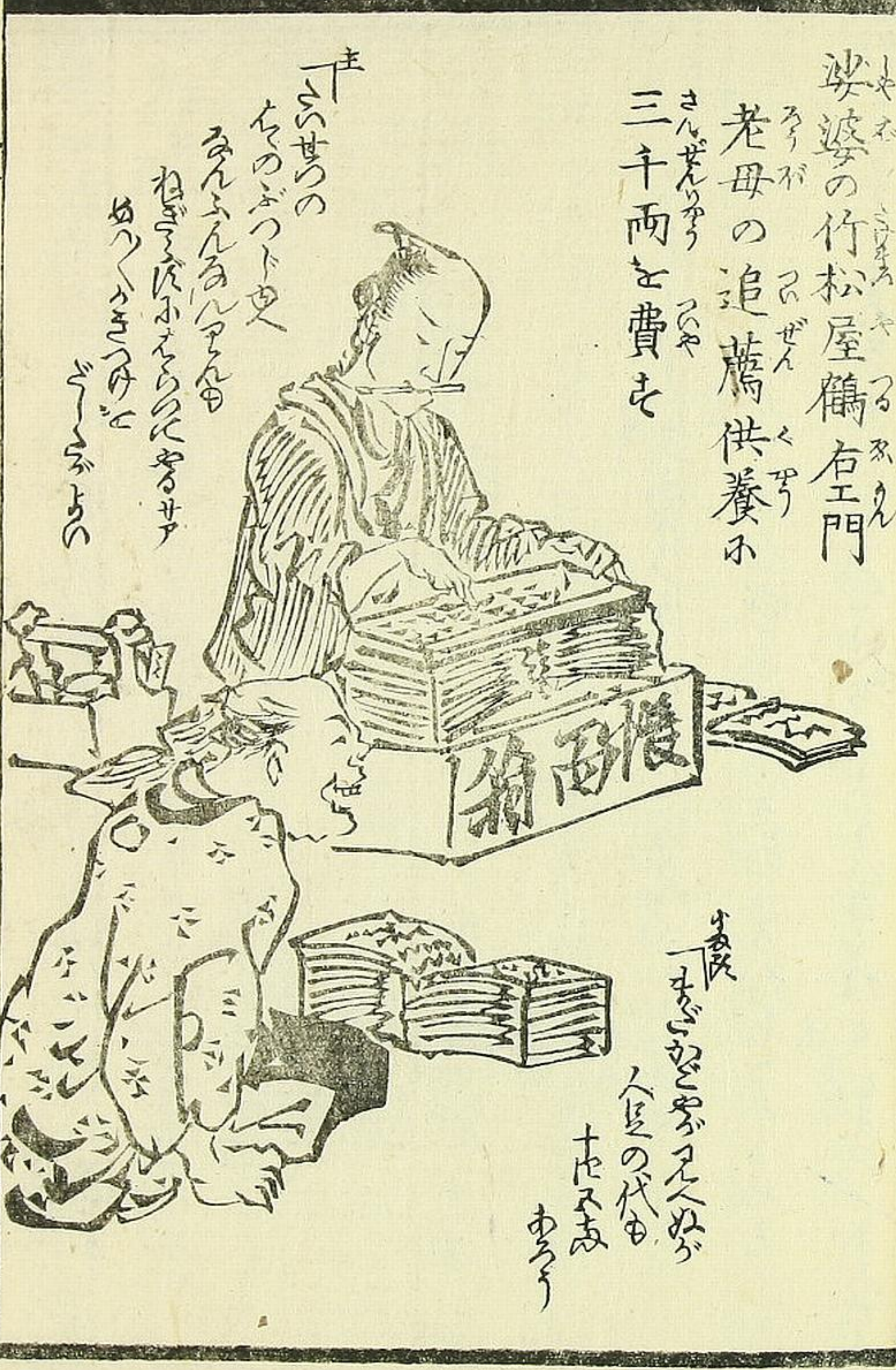




「お母さん、お茶をどうぞ」  
 「はい、ありがとうございます」  
 「お母さん、お茶をどうぞ」  
 「はい、ありがとうございます」  
 「お母さん、お茶をどうぞ」  
 「はい、ありがとうございます」  
 「お母さん、お茶をどうぞ」  
 「はい、ありがとうございます」

娑婆の竹松屋鶴右工門

老母の追薦供養の  
 三千両を費す



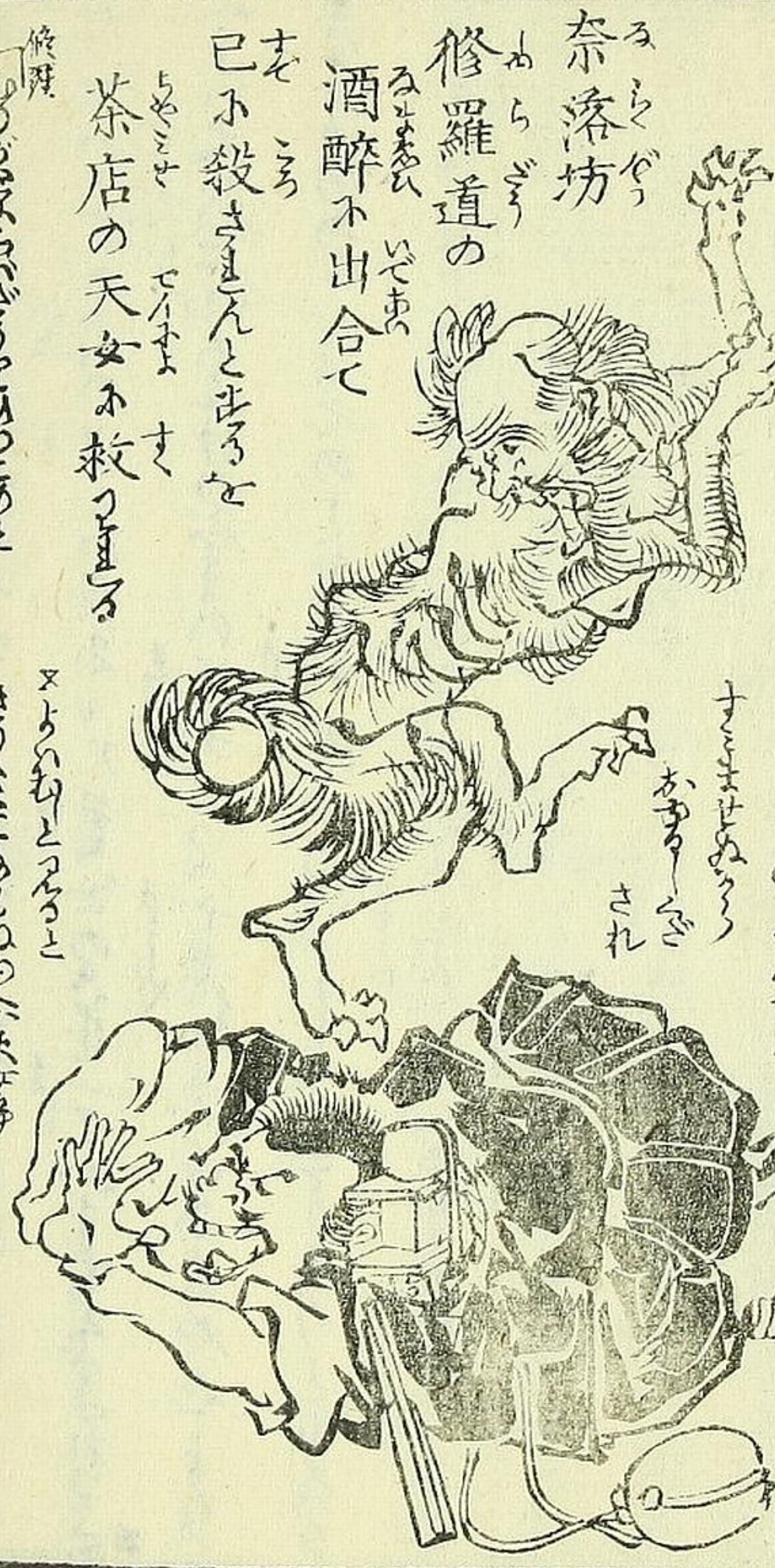
主  
 主のぶつと  
 主のぶつと  
 主のぶつと

お母さん、お茶をどうぞ  
 人豆の代也  
 十代五也  
 中々





犬  
「あつちがあつちがうらやま  
うらやまがうらやまにうらやま  
あつちがうらやまにうらやま」



茶  
「うらやまがうらやま  
うらやまがうらやまにうらやま  
あつちがうらやまにうらやま」

「あつちがうらやまにうらやま  
うらやまがうらやまにうらやま  
あつちがうらやまにうらやま」

奈落坊

修羅道の

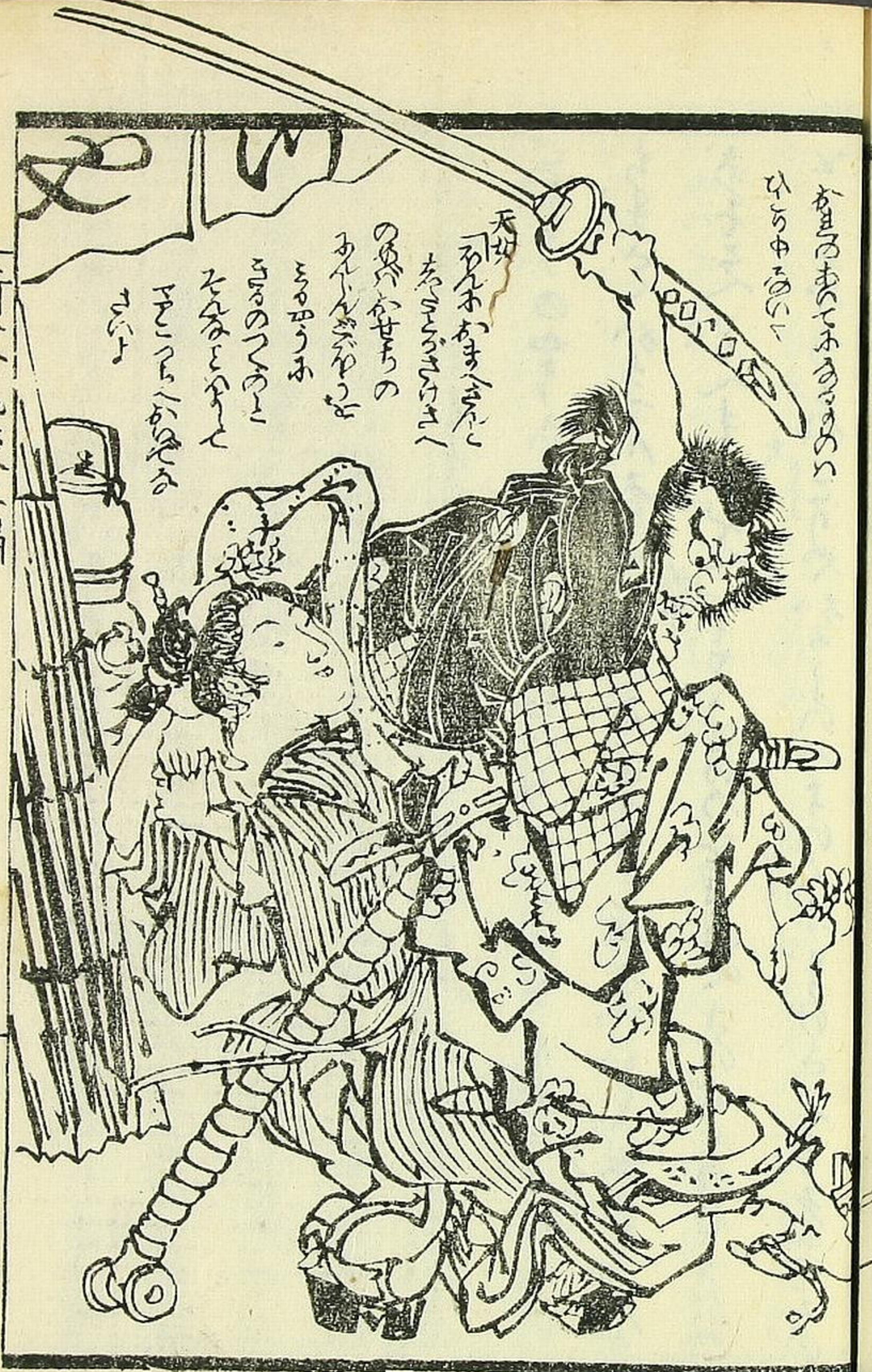
酒酔不出合て

已小殺きさんと出るを

茶店の天女小救うする

修羅  
「あつちがうらやまにうらやま  
うらやまがうらやまにうらやま」

「あつちがうらやまにうらやま  
うらやまがうらやまにうらやま  
あつちがうらやまにうらやま」



あつちがうらやまにうらやま  
うらやまがうらやまにうらやま

天女  
「あつちがうらやまにうらやま  
うらやまがうらやまにうらやま」

「あつちがうらやまにうらやま  
うらやまがうらやまにうらやま  
あつちがうらやまにうらやま」



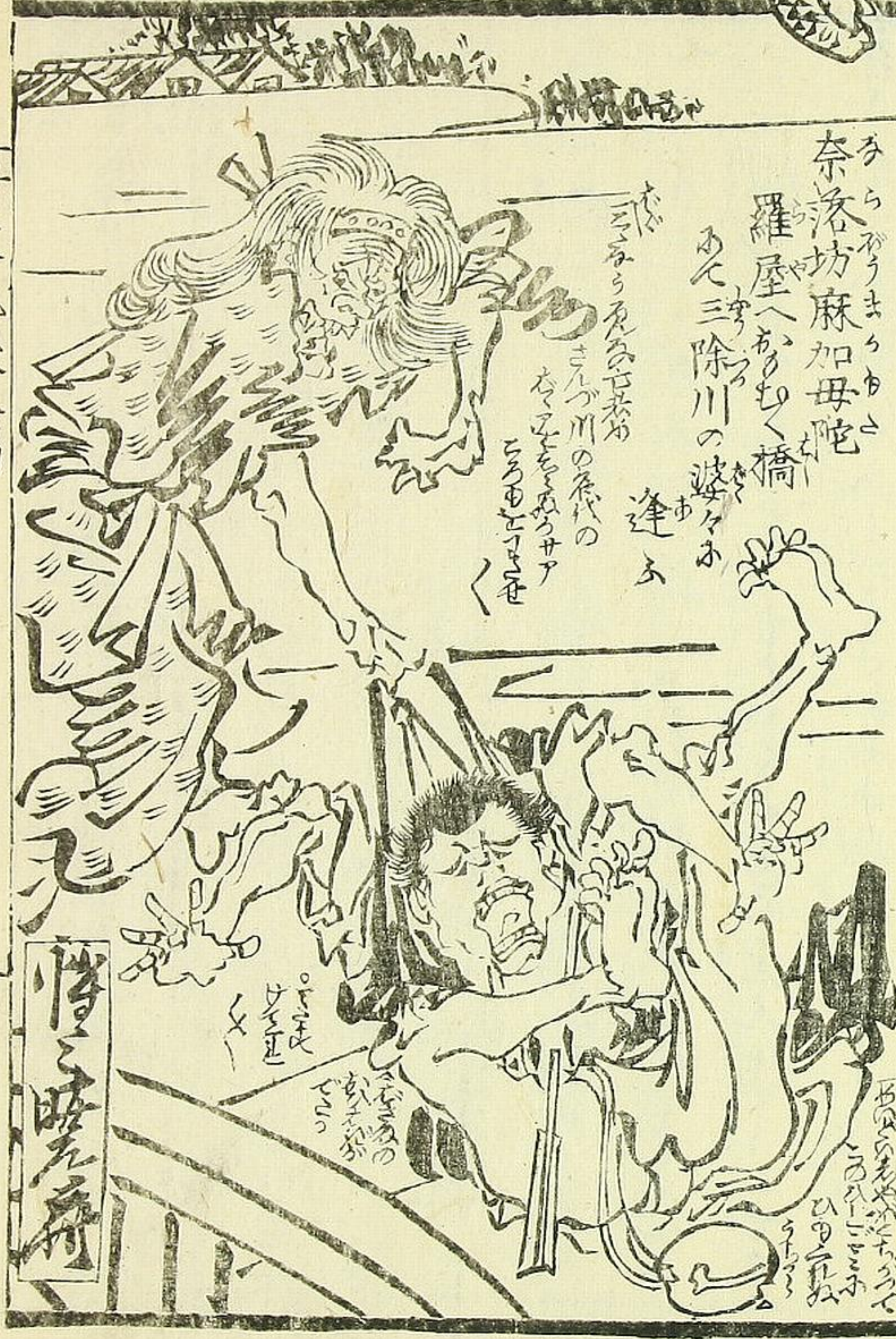
あんのぞくさいぜんの天女てんこよのりんとるまうらうらんとま「ま  
 いまいかうげだ命いのちがなまじりまうそのおれられらへくおまじり  
 まいりうでもるの天女てんこよのうちおまじりの亡者おつやのありませぬ  
 るんでおれおおれおびままをうおのちめらさんいふことせせ  
 かるまるりままたひたのぬぐおのじとくまくまて  
 ありそゆまままままづづらのおせまさうけらおめんとて  
 あやうめをますますまて天女てんこよのうちのおままくまとまぬぬ  
 ありませんがそのままりまりまりまの亡者おつやままいまことま  
 ありませんま「そままじりまのうちままやま人またまおまままりまりま」

あまのりんとるまうらうらんとま「ま  
 いまいかうげだ命いのちがなまじりまうそのおれられらへくおまじり  
 まいりうでもるの天女てんこよのうちおまじりの亡者おつやのありませぬ  
 るんでおれおおれおびままをうおのちめらさんいふことせせ  
 かるまるりままたひたのぬぐおのじとくまくまて  
 ありそゆまままままづづらのおせまさうけらおめんとて  
 あやうめをますますまて天女てんこよのうちのおままくまとまぬぬ  
 ありませんがそのままりまりまりまの亡者おつやままいまことま  
 ありませんま「そままじりまのうちままやま人またまおまままりまりま」

天

天

ままのどしとあけぬ由らまも終るこ味せんであそんでまうりかりはし  
 がさたごうよりりつきの天人妻の上の親味ふふけりんむま  
 たることをさしなまそあへくひ業をせよとふんこやうがあまじせひ  
 るく天女さあらしうのあまあひらおどりふげいのあいのめ  
 茶つえせ揚弓のゆうせごをいこまそて「いそうあそていそらぬ  
 こけ天上のさざりりの日天子月天子さあまおうせごるあま  
 のとそ光とろけりものむごひとまらいたをさしあひんせう  
 の大家あて簡やつとたのこ味せんのをあかま入まうま  
 あまのるんでぶえます「あまの除川のはらまらまらこりぬ





拾遺舎ヲそとく其の懐たさぬがふの正月十六日不るまき大  
 舎からふおのびと更六夜のうちおのり名人のたまはと味せん  
 ひさうく女藝者おどり子よきて藝人と名をつくのを敷  
 揚るまき大舎るまきいおのかりて老まひやへそあるこもえ物  
 きくもまへのわいであるまき入夜のおがまきあつまきいお  
 ねの亡者もまきつとわいだがあらう「まきおまきがまきいお  
 でありまき入夜おわき縁のりまき極楽おまきいおまきいお  
 一の役目であるけしおまきいおまきいおまきいおまきいお  
 ろのりまきいおまきいおまきいおまきいおまきいおまきいお

いままこととまきいおまきいおまきいおまきいおまきいお  
 まきいおのまきいおまきいおまきいおまきいおまきいお  
 があつまきいおまきいおまきいおまきいおまきいおまきいお  
 のえせのまきいおまきいおまきいおまきいおまきいおまきいお  
 まきいおのまきいおまきいおまきいおまきいおまきいおまきいお  
 ろのりまきいおまきいおまきいおまきいおまきいおまきいお  
 牛乳の車おのりまきいおまきいおまきいおまきいおまきいお  
 おろまきいおまきいおまきいおまきいおまきいおまきいお  
 まきいおのまきいおまきいおまきいおまきいおまきいおまきいお

二十七日大ニ三編

三二

大鈍託新文鬼談二号終

三世野悟道子地獄の罪人を引率と極楽の悪弊と決問ふ及ぶ條り

同三号

豊年五穀祭享

理解新文

万亭應賀著

文名皆 和談三才圖笑

万亭應賀著

新屋哇真言

万亭應賀著

音曲獨免許

萬之亭應賀著

發行

全	四京御幸町	炭	屋孫兵衛
全	大坂心齋橋通備後町	近江	屋平助
全	東京日本橋通二丁目	境	屋卯八郎
全	二丁目	須原	屋茂兵衛
全	全	山城	屋佐兵衛
全	通四丁目	小	林新兵衛
全	芝神明前	須原	屋佐助
全	横山町二丁目	和泉	屋市兵衛
全	浅草第町二丁目	和泉	屋金右衛門
全	浅草廣小路	須原	屋伊八
全	馬喰町二丁目	浅	倉久兵衛
全	横山町二丁目	森	屋治兵衛
全	通油町	出雲	寺萬次郎
		藤岡	屋慶次郎

書肆

一

